

研究課題

Languaging：中学生の英文ライティングにおける文法の正確性を高めるためのLanguagingの有効性

副題

学校名	下諏訪町立下諏訪中学校
所在地	〒393-0052 長野県諏訪郡下諏訪町5480番地
学級数	11
児童・生徒数	321名
職員数/会員数	32名
学校長	小倉 克彦
研究代表者	牛山 真弓



1. はじめに

本校のある下諏訪町では、平成13年度より、課題解決型の活動を念頭に、小学校1年生からコミュニケーションに対する積極的な態度の育成に力を入れた、週1時間の英語の授業を行ってきた。しかし、中学校に入学してくる生徒は「英語を使えるようになりたい」という願いを持っている一方で、初めて英文の読み書きを経験し、文字学習に抵抗を覚える者が多くいる。加えて、「英語が読めない・書けない」という経験が重なると、英語学習に対するモチベーションが一層低下していくことは火を見るより明らかである。これに対して、日本のように英語を外国語として学習する環境では、インプットやインターアクション、また、フィードバックの機会がきわめて少ない英語のライティングの指導方法に関して、効果的かつ効率的な指導法を見極めることに英語科担当の教員は苦戦している。国立教育政策研究所による「学習指導要領実施状況調査（平成13・15年度）」では、「一文でも多くの文を書かせる」ことが常套手段であり、「三文以上書きなさい」という「書く量」を問題としているが、書く内容や生徒の書くことへの意識に対する配慮が不十分である傾向がある。

このような現状を改善するために本校では昨年度より、生徒に「英文が書けるようになった」という自信と達成感を与えるライティング活動のあり方と、ライティングを通して生徒が文法正確性を高めるための教師によるフィードバックの有効性を精査してきた。また、同時に、「書く力」の伸張のためのライティング活動や作品に対するフィードバックのあり方を実証研究を通して探ろうとしている。外国語（英語）

教育に限定されることではないが、生徒の活動への関わり方や程度、また、教員の支援の方法がライティング力伸長の鍵のひとつとなると考えられる。外国語教育、とりわけ、第二言語習得研究の分野では、Swain (2006) が、‘Languaging’を取り上げ、「言語を発することを通して学習者が理解や問題解決をし、さらなる知識を作り出す認知手段」が学習指導要領の目標のひとつでもある「積極的なコミュニケーションへの態度」の育成にも通じるものがあると考えている。先行研究からは「黙って課題に取り組んだ学習者よりも（口頭で）解説をしながら一文一文読み進めていった学習者の方が、より正確で、深い理解に到達し、長い間その記憶を保持した」という結果が報告されている。この種の考えを基本に、ライティング活動後のフィードバック時にLanguagingを取り入れることで、文の量に増加傾向があり、生徒が自身の間違いを振り返り、理解を促進する手段となりうるという仮説を立て、本研究を行ってきた。本研究では中学1年生を対象に、Languagingが意欲面と同時に文の量や文法正確性向上に有効であるか追究する。

2. 研究の目的

この研究で日本の教室環境におけるLanguagingの有効性を公にすることにより、英語の授業でのライティング活動における効果的なフィードバックの具体的な方法が明らかになり、生徒の英作文能力伸長の鍵となるものである。また、ペアのLanguagingを聞くことによる波及効果を検証することによって、これまでの教師からのやや一方的なライティング指導を、教師の指導と生徒の自発的・積極的な関わりのある

インタラクティブなライティング活動へと変えることができると同時に、有効なペアリングも探ることができる。このことは、現在英語授業で取り入れられている、少人数コースを「習熟度別」にするのが良いのか「等質均等割り」にする方がより効果的なのか手探り状態の学校に一助となるのではないかと思う。

この活動はライティングの特設単元を設けなくても、日々の授業の中で、即、生かすことができ、こうした「書く→フィードバック」を積み重ねていくことで、結果的に、「まとまった英文をより正確に書くことができるようになった」との実感が、次への動機付けとなり、相乗効果が期待できると考える。

3. 研究の内容と方法

(1) 研究設問

- ① Languaging が文法正確性向上に与える短期的・長期的効果の検証
- ② ペアの相手の Languaging を聞くことによる文法正確性向上への波及効果の検証

(2) 研究対象

被験者は 12 歳から 13 歳の中学 1 年生 95 名である。ほとんどの生徒が小学校 1 年生より、コミュニケーション態度育成を目的とした週 1 日、45 分間の英語の授業を受け、現在は週 3 日各 50 分間、文部科学省の検定教科書 New Crown を基本とした授業を受けている。本研究では実験群 1 クラス (32 名)、統制群 2 クラス (30 名、33 名) で構成される 3 クラスを対象に行った。

(3) 手法

① 研究デザイン

中学校に入学後、ある程度語彙や文法が増えてくる 1 年の 2 学期、3 学期に研究を実施した。具体的には、各単元にひとつのライティングテーマを与え、習った英語を使って数文まとまりのある英文を書かせ、教師は生徒の作品を回収し、検証したい文法項目 (三人称一般動詞・be 動詞・現在進行形) のエラーを含む生徒作品を抽出する。抽出した生徒作品はエラー箇所以外の部分は形を変え、個人が特定できないようにパソコンで打ち直し、次時に増し刷りした抽出作品を全生徒に渡し、エラーについて生徒が考える時間を設ける。その際、それぞれ約 30 名で構成する次の 3 グループに分ける。【グループ 1・3: 統制群、グループ 2: 実験群…エラーについて、ペアで理由を話し合う】

グループ 1・3 とグループ 2 を比較することによって Languaging が文法事項習得に有効であるか検証する。また、Languaging の効果を検証する際には、データ収集を IC レコーダーを使って行い、ペアで行われた会話を録音し、分析する。生徒の中には、何がエラーなのか分からず、全く Languaging が行われない者もいると予想されるが、もしペア

の生徒が何らかの Languaging を行った場合には、ペアによる Languaging を聞いたことによる波及効果を調べる。

1 ヶ月後に対象言語項目を使うようなタスクを生徒に与え、事後テストを行い、Languaging の短期的・長期的効果を生徒の書いた英文の質 (文法正確性) と量 (流暢さ) の変化から分析する。

4. 研究の経過

(1) アンケート

研究に先立ち、まず 95 名の生徒を対象に、以下の 4 つの項目から成る英語活動に対する生徒の意識調査を行った。その結果、「書く力を伸ばしたい」と考える生徒は全体の 73% に及び、生徒が「話す」同様、Productive skill を伸ばしたいという願いを持っていることが分かった。しかしながら、「書く活動が好きか」という質問に対しては、「全く思わない」と答えた生徒が 95 人中 11 人と他の領域よりも多いことから「書く力を伸ばしたい」と思っているが「活動は面白くない」と考えている生徒が少なくないことがこの結果からうかがえる。この結果から、生徒は書く活動に対して、「苦手意識はあるが、伸ばしたいという気持ちも強い。しかしながら教師からの一方的な書く活動に面白くないと感じている」ということがみてとれる。

- 1 あなたの今の様子を教えてください (「聞く」「読む」「話す」「書く」で得意/不得意を問う質問)。
- 2 あなたは今、「聞く・話す・読む・書く」のうちどの力を伸ばしたいと思っていますか?
- 3 あなたは次の英語活動は好きですか?
- 4 英語を書く活動でどんな所が難しいと思いますか?

英語学習アンケート (平成 22 年 9 月実施)

(2) Languaging は文法の正確性向上に効果的か

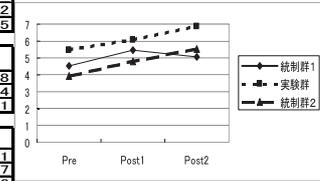
① 三人称一般動詞、be 動詞を使った単文における正答率の変化

一般動詞の三人称の学習をした後に Pre-test を行い、生徒の理解レベルを見るとともに、エラー傾向を分析し、その 1 週間後に実験群はペアによる Languaging 活動を行った。ここでは、Pre-test から得た生徒の典型的なエラーを含めた英文 19 文をペアで 10 分間、口頭で解説をしながら修正させる時間をとった。その後行った Immediate Post-test、1 ヶ月後の Delayed Post-test の結果、英文の正答率数で次の表・図 I のような結果が得られた。平均点は、生徒が書いた正確な文数の平均である。

この結果を見ると、実験群、統制群ともに平均正答数が向上しているが、実験群が Post-test 1、Post-test 2 ともに正答数が上昇しているのに対し、統制群 1 では 1 ヶ月後の Post-test 2 で正答数が下がってしまっていることが分かる。また、さらに詳しく分析を行った結果、三単元の S は教師による繰り返しの Input と同等の効果が 1 回の Languaging 活動で得られることを示唆する結果があらわれ、三人称の否定形

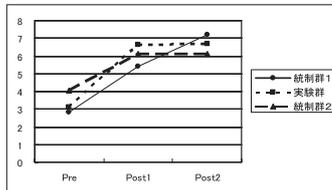
【表・図Ⅰ 平均正答数の変化】

Pre-test					
	人数	平均 文総数	平均 正答数	分散	標準 偏差
統制群1	30	5.47	4.53	8.38	2.90
実験群	32	6.00	5.47	9.12	3.02
統制群2	33	5.06	3.91	5.05	2.25
Post-test1					
	人数	平均 文総数	平均 正答数	分散	標準 偏差
統制群1	30	5.65	5.45	10.76	3.28
実験群	32	5.43	6.07	15.51	3.94
統制群2	33	5.29	4.83	12.33	3.51
Post-test2					
	人数	平均 文総数	平均 正答数	分散	標準 偏差
統制群1	30	8.57	5.10	13.76	3.71
実験群	32	9.16	6.84	19.97	4.47
統制群2	33	9.76	5.55	17.28	4.16



は教師による修正インプットより Languaging の方が効果的であることを示す結果が見られた。一方で、三人称の be 動詞では、Languaging がなくても学習者は高い習得率を得ている可能性を示す結果となった。また、現在進行形【図Ⅱ】も同様に、実験群、統制群ともに正答数が上昇する傾向がみられた。このことは、Languaging が効果的に働く文法項目と Languaging を用いなくても習得可能な文法項目があることを示唆するのではないかと考えられる。

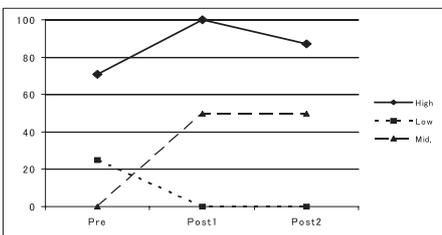
【図Ⅱ 正答数の変化： 現在進行形】



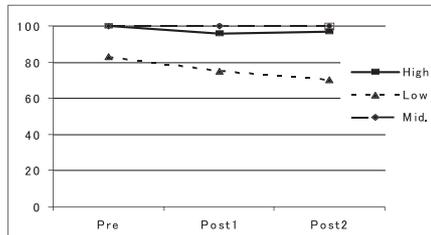
② ペアの相手のLanguagingを聞くことによる文法正確性向上への波及効果の検証

次に、Languaging を積極的に行った学習者、ペアの Languaging を聞いた学習者、Languaging を行えなかった学習者をそれぞれ 'High Languageur' 'Middle Languageur' 'Low Languageur' とし、それぞれの学習者の正答率の変化を分析した（図Ⅲ - ①～③）。Middle Languageur の中には自分では正答を見つけることは出来なかったが、ペアの Languaging を聞き、リピートをした学習者も含まれている。

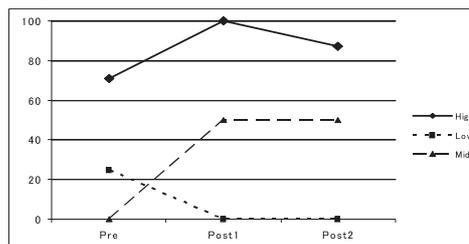
①三人称動詞の正答率変化



②be動詞の正答率変化



③三人称否定文の正答率変化



【図Ⅲ①～③】

High …High Languageur
Middle…Middle Languageur
Low …Low Languageur

本研究では実験群の内、'High Languageur'、'Middle Languageur'、'Low Languageur'の人数はそれぞれ 13 人、4人、15 人の小規模による検証であったため、さらなる検証が必要であるが、この結果は Languaging は学習者が自分でエラーを修正することができなかったとしても、Languaging を聞くことによって理解を深める波及効果がある可能性を示すものとなった。

5. 研究の成果と今後の課題

これまでの研究を分析した結果、いくつかの興味深い点を見つけることができた。まず、第1に Languaging が効果的に働く文法項目と Languaging の有無に関わらず学習者が習得をしていく、または Languaging の効果が見られない文法項目がある可能性を示唆する結果がみられた。2点目は Languaging の波及効果である。少なくとも短期的には Languaging にはペアの Languaging を聞いた学習者の理解を深める波及効果がある可能性があるということである。研究を実施する中で、ペアとなった学習者相方がスローラーナーであったために、文法の誤りを見つけることができず、Languaging が全く行われずに理解を深めることができなかったペアもあった。このことは、教師が今後学習を行う際に、ペアリングに配慮をする必要があることを示唆するものではないかと考える。しかしながら、本研究では、実験群がエラーを修正する際に、メタ認知的説明ができないためにペアでの対話を行うことができなかった学習者がいたことが考えられるため、今後の研究ではメタ認知的説明をする機会を事前にとり、学習者が慣れた上で検証を行う必要がある。その上で、さらに多くの文法項目、とりわけ Global error を引き起こす文法項目についてさらなる検証を深めていくと同時に、Languaging はスピーキングの量や質を高めるのに有効であるかについても探っていきたい。

参考文献

Swain, M. (2006) Languaging, agency and collaboration in advanced second language proficiency. In Byrnes, H. (Eds.) Advanced language learning, pp95-108.